

言葉と文字は一心同体である

ところが、「言葉は精神だが、文字はそれを入れる容器だ。」という人がいます、言葉は大切に、これを他から借りてくることはできないが、文字は捨てることも、他から借りてくることもできる、と言うのです。

言葉と文字との関係を、このように切り離して考えることは、精神と肉体とを切り離して考える考え方よりも危険です、私は、精神あつての肉体、肉体あつての精神だ、と考えて、精神を軽視する肉体観、肉体を軽視する精神観を否定しますが、言葉と文字との関係は、精神と肉体以上に緊密な関係にあるものだと考えているものです。

初め、文字というものが発明された時には、聴覚に訴える言葉を視覚に訴えるものに換えた、というのにすぎませんでした。その意味では、容器という表現も認められましょう。

しかし、文字はいったん用いられ始めますと、“音声言語”である言葉に対する、視覚言語”として、むしろ言葉以上に、人間の心を表わす働きを始めたのです。

それだけではありません。逆に、文字によって言葉を作り、精神を生み出すまでになったのです。「仁」「義」「礼」「智」などは、文字によって生み出された精神の一つです。

たとえば「仁」は、言葉として見る時は「人」です。人間の人間に対する愛、英語でいうヒューマニティー(ヒューマンは人間の意)を、「人と人」、つまり「仁(二人)」という文字でこれを表わすことにしたのです。そ

して、言葉としては、「人」と同じく「ジン」と発音しているのです。つまり、仁という精神は「仁」という文字によって初めて確乎たる精神になりえたのであって、それまでは、あいまいとして人に示す事はできなかったものです。